

令和6年度 学校評価 考察

項目	目標	児童	教職員	保護者	
1	豊かな心	子供は楽しく登校している(笑顔、明るく活気のある学校)	87	78	91
2		子供は友達に優しく接することができる。(支え合い、認め合う学級)	96	100	99
3		子供はあいさつや言葉遣いなど、基本的な生活習慣が身についている。(心を育む生活指導)	96	100	93
4		子供は整理整頓など身の回りをきれいにしている。(美しく整えられ安全に学べる学校)	90	78	73
5	確かな学力	子供は授業がわかりやすいと言っている。(基礎学力の定着を目指した授業展開)	88	100	79
6		子供は自分の考えを書いたり、話したりすることを苦にしていない。(話す・書く活動を取り入れた授業)	85	94	70
7		子供は宿題をきちんとし、家庭学習に意欲的に取り組んでいる。(家庭学習の習慣化)	89	100	89
8		子供は読書が好きで、よく本を読んでいる。(読書活動の推進)	77	93	67
9	健やかな体	子供は学校外でも元気に運動や外遊びをしている。(基礎体力の増進)	84	87	79
10		子供は手洗い・うがい等、衛生習慣が身についている。(性教育・基本的な保健衛生習慣)	93	80	90
11		子供は早寝・早起き等、規則正しい生活習慣が身についている。	81		89
12		子供は食事のマナーや偏食の改善等について成長がみられる。(感謝の心を育む食育推進)	88	80	86
13	夢憧れ	学校は子供に目標を持たせながら、いろいろな活動に取り組ませている。(認め勇気づける指導)		100	90
14		学校は個に応じた教育支援を大切にしている。(特別支援教育の視点)		89	81
15	連携・協力	学校は学校だよりや学級通信等で教育活動の様子を知らせている。(家庭・地域連携)		56	91
16		学校は学校支援会議や支援ボランティアを活用し、特色ある開かれた学校づくりに努めている。		100	91
17		学校は保護者からの相談等に真摯に応じている。		94	88
18		学校は登下校の安全や校内の安全に配慮している。(事故、けが等の連絡)		94	96

肯定率 86%以上:A 85~76%:B(黄) 76%未満:C(赤)

【検証】

1	18項目中、12項目で肯定率86%以上(A評価:保護者)となっており、特に「あいさつ」「人にやさしく接する」等、豊かな心の育成にかかる部分については保護者、児童、教職員も高い評価であったため、全校的に本校の取組の効果が表れていると考える。
2	項目2「人権教育」については児童・教職員・保護者とも高い評価を示している。目指す児童像の柱の一つであり、児童会テーマである「ハッピー、ハッピー、ハッピー」をあらゆる行事、学年活動等において繰り返し掲げてきたことから学校全体に定着していると考え。今後も継続・深化させていくことで、いじめ「0」につなげていく。
3	項目4「整理整頓」については、児童と保護者で大きく判断が分かれている。整えられた環境に対する感じ方の違いと考える。教職員の評価も低いことから教室、その他の教育環境の整頓、清掃指導における心の教育が不十分であったこともその要因の一つと考える。
4	項目5「わかりやすい授業」については保護者の評価が低くなっている。コメントの中に「教職員によって授業力に差がある」との指摘があることから、個々の教職員が自身の指導力について児童の側に立って振り返りをし、検証していくとともに指導力についてさらに努力をしていく必要がある。
5	項目6「書くこと話すことへの取組」については、児童・保護者で評価が低かった。これまでも本校児童の課題であり、授業の中で交流の時間を確保しているものの、自他の考えを交流することによる学習内容の理解促進、他者とのかかわり方の向上等交流の良さが実感として得られていない。教職員の働きかけが不十分であったと考える。
6	項目7「家庭学習への取組」については、児童・保護者・教職員の評価が高かった。これは、児童に家庭学習の習慣が身に付いていると考える。ただ、少数ではあるが取り組まない子もおり、家庭の協力も得にくいのが現状である。家庭での生活リズムの啓発を図りながら、家庭学習の重要性を本人に理解させていく必要がある。
7	項目8「読書の習慣化」については、児童・保護者の評価が低くなっている。家庭読書等実施しているが、引き続き家庭への啓発を行う必要がある。また、児童の自己評価で「1」の評価をした児童が全体の約1割(20名)であった。児童の活字離れも考えられるため、個に応じた選書のアドバイスや読み聞かせ等を行っていく必要がある。
8	項目9・11については、メディアの影響による生活習慣の変化がその要因と考えられる。情報モラル教育、健康への影響などメディアとの付き合い方については、授業で取り上げたり、家庭への啓発等行ったりしてきたが、さらに児童自身が必要感・危機感をもてる手立てを実践していく必要がある。
9	項目14については、今年度通級指導教室を立ち上げたことから、通常学級においても児童の個性に注目し、必要な手立てを打ってきたことが教職員の評価に表れている。保護者の評価が高くないのは特別支援教育に関する学校の取組がよく伝わっていなかったと考える。今後は育友会等保護者が集まる場での説明が必要である。
10	項目15「教育活動の公開・情報共有」については教職員の評価が低かった。学級通信の発行は個人差もあり、教職員の中には他教師との比較から自己評価を下げている者もいる。家庭・地域との連携は本校の目指す学校像の柱でもあるため、通信だけでなく、連携事業の在り方・頻度等、今後も強化・工夫していく必要がある。
<p>※アンケートの中で、児童の登下校について安全面に関する事、歩行中のマナーに関する事等への指摘があった。本校は地域の方や育友会役員の方による見守りもなされているが、児童には、それを当たり前と思わず、「自分の命は自分で守る気持ちが大切」との指導を続けている。100%定着するよう指導を重ねていく必要がある。</p>	